

天理図書館蔵

『貞和本和漢朗詠集』の訓点をめぐって

稲垣信子

一、はじめに

『和漢朗詠集』には、古来数多くの註釈書がある。その総てについてここで言及することはできないが、稿者の立場から大まかな認識を若干記しておくならば以下のようなになるうか。

今日でも良質の訓読文（古点本や古注釈を生かしている）を提供し、古注釈の概説も行った山田孝雄博士の基礎的な研究^{〔1〕}や、校異を含む書誌学的調査に大きな意義を残す堀部正二氏の仕事がある更に、近年、黒田彰・伊藤正義・三木雅博氏らによる『和漢朗詠集古注釈集成』^{〔2〕}は、古注釈の解題とその基本的な

本文をまとめて収録し、『朗詠』研究をより一層深める重要な成果である。既に黒田氏^{〔3〕}・三木氏^{〔4〕}・山崎氏ら^{〔5〕}によって『朗詠』の古注釈の世界が詳細に論じられており、中世の文学世界に大きな影響を与えていたことが明らかになった。その後、『朗詠』の誦詠という新たな角度から成果を挙げた青柳隆志氏^{〔7〕}の研究も興味深い。

加えて、写真や印刷技術の進歩により、諸本の良質な複製が「書蹟」として多数刊行されるようになったことも記しておくなければならぬ。貴重な文献を誰でも身近に容易に披見できる好条件が整ってきたわけである。

本稿では、その多くの現存する和漢朗詠集訓点本の中で、菅原家相伝の訓読を伝えている竹柏園旧蔵天理図書館蔵貞和三年安倍直明書写加点本（以下「該本」と言う）の訓点の諸事象について検討を行った。

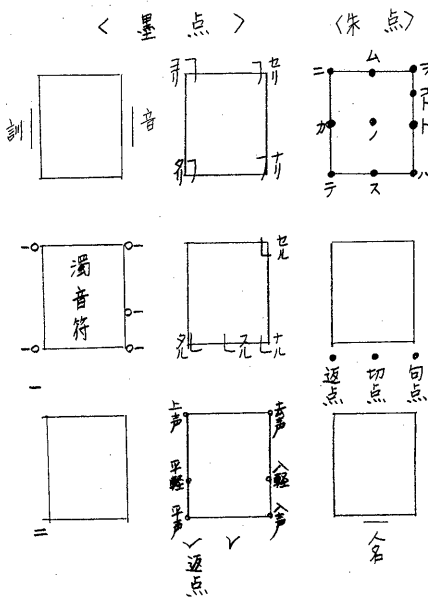
該本については、堀部正二氏により「文章博士菅原長成が父爲長の説を受けて自ら執筆加點した本を以て建長三年（一二二四）後深草天皇に進講し申上げた、その時の本が底本となつて、それに江大府卿（大江匡房）の説を記入し、次いで藤原式家敦光朝臣の本を以て校したのが基礎となつてゐるのである。更に弘安三年（一二八〇）・貞和三年（一二三四）の再度に転写されたもの」と指摘されている。

本文には、朱点・墨点によつて乎古止点を示し、墨筆・朱筆・黄筆による書き込み等がなされている。

今回は、同時期の書写加点の菅原家相伝本の和漢朗詠集との比較・検討を行うことにより、該本の訓点の諸事象、ことに朱筆・黄筆等による色別けの性格について考察を試みてみたい。

二、該本の訓点について

ア、乎古止点図



加点には、朱点・墨点が使用されているが図のようにその体系を復元することができる。形式は、枋尾武氏が指摘されている「博士家点」の「紀伝点」である。

また、墨点においては、レ点・一二点・上下点が使用されて

いる。濁音表記については、後に項を設けて詳しく述べることにする。

イ、仮名字体表

ン	ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア		
ン	木口	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	七サ	カ	ア	墨	筆
	ッ		ヤ	マ	ハ	ナ	タ	七	カ	ア	朱	筆
					ハ	ナ	タ	七			黄	筆
			ヤ	マ	ハ	ナ	タ	七			青	筆
符	疊	井	リ	ミ	ヒ	ニ	ケ	シ	キ	イ		
オル	井	リ		ア	ヒ	ルニ	ケ	シ	キ	イ	墨	筆
		リ		ミ		ルニ		シ	キ	イ	朱	筆
	井			ア		ニ		シ	キ	イ	黄	筆
											青	筆
ナクク(墨筆)		ル	ユ	ム	フ	又	ツ	ス	ク	ウ		
		ル	ユ	ム	フ	又	ツ	ルス	ク	ウ	墨	筆
		ル	ユ	ム	フ		ツ	ス	ク	ウ	朱	筆
		ル		ム		又	ツ	ス		ウ	黄	筆
シテ	工	レ		メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ		
		レ		メ	ヘ	子ネ	テ	セ	ケ	エ	墨	筆
		レ		メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ		朱	筆
		レ					テ				黄	筆
メ(墨筆)	マ	口	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ		
	マ	口	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ	墨	筆
	マ		ヨ	モ		ノ	ト		コ		朱	筆
	マ					ノ	ト	ソ	コ	オ	黄	筆

該本では、墨筆の仮名字体に「ハ」「カ」「シ」「ネ」が用いられているが、他にこれらのすべてが用いられているものとしては、『群書治要』(鎌倉期点・宮内庁図書寮¹⁾)がある。墨筆には、朱筆・黄筆・青筆に比べて古体の仮名の使用が多い。このことにより、仮名においては墨筆が他の筆よりも古く、墨筆と色別けして付されたものの方が、より新しいといった時代的推移を読み取ることが可能である。ただし、墨筆にも、古体の仮名とは異なる字体の仮名も使用されており、後世の手が入っていると推察できる。

ウ、清濁表記

濁音符は、さきの平古止点図において示したように、下巻・626(岩波古典文学大系『和漢朗詠集』作品番号を示す)「四・七・五・八」に使用されている「。」「。」を除き、上巻・下巻にわたって「。」「。」が交用されている。

紀伝点の諸家使用の濁音符については、小林芳規氏が『平安鎌倉時代に於ける漢籍訓讀の国語史的研究』²⁾のなかで、「菅原家『。』』藤原式家』。』藤原南家』。』(推定)と示され、また、『。』を用いた博士家の點本を』。』使用の博士家学者が移點

する場合、或いはその逆の場合に、濁音符は、元の點本の形式に従うのが建前であろう。しかし、多くの例の中には稀に自家の符號が入る可能性が生ずる」とのべられている。この説に従うと次のように考えられる。

該本は、さきののべたように菅原長成が、文爲長の説を受けて、自ら執筆加点了した本が底本となっていることからして、訓点は基本的には菅原家のものであるとみられる。しかし、濁音符の使用状況などから考えると、弘安三年または、貞和三年において藤原長英の書写加點の際、自家(藤原式家)の濁音符を用いたものと推察できることになる。

エ、助字の訓法(マル括弧に入れたものは平古止点で示されているものである。)

・「將」の訓法

1 將^(E)希^(E)兩^(E)露^(E)

213 將^(E)明^(E)願^(E)驚^(E)

759 將^(E)去^(E)

・「未」の訓法

793	774	761	719	685	213	141	106	99	84	63
未 _レ 免 _ル ト _レ 免 _ル	未 _レ 央 _ル ト _レ 央 _ル	未 _レ 爲 _ル 花 _ル ト _レ 爲 _ル 花 _ル	未 _レ 鳴 _ル ト _レ 鳴 _ル	未 _レ 仕 _ル ト _レ 仕 _ル	未 _レ 叙 _ル 別 _レ 緒 _ル	未 _レ 奉 _ル 行 _ル ト _レ 奉 _ル 行 _ル	未 _レ 開 _ル 豈 _レ 越 _ル ト _レ 開 _ル 豈 _レ 越 _ル	未 _レ 揚 _ル 塵 _ル ト _レ 揚 _ル 塵 _ル	未 _レ 晴 _ル ト _レ 晴 _ル	未 _レ 出 _ル
795	782	762	753	712	661	200	120	103	89	64
未 _レ 道 _ル ト _レ 道 _ル	未 _レ 能 _ル 眠 _ル ト _レ 能 _ル 眠 _ル	未 _レ 必 _ル 賢 _ル ト _レ 必 _ル 賢 _ル	未 _レ 知 _ル 英 _レ 雄 _レ 之 _レ 所 _ル	未 _レ 下 _ル ト _レ 下 _ル	未 _レ 到 _ル 常 _レ 樂 _ル	未 _レ 至 _ル 前 _ル ト _レ 至 _ル 前 _ル	未 _レ 豐 _ル ト _レ 豐 _ル	未 _レ 多 _ル 遮 _レ 得 _レ 上 _レ 樓 _レ 人 _ル	未 _レ 扇 _ル 花 _ル ト _レ 扇 _ル 花 _ル	未 _レ 卷 _ル ト _レ 卷 _ル

・「應」の訓法

145	541	436	398	378	255	214	138	40
當 _レ 招 _レ 邑 _レ 若 _レ 蚶 _ル ト _レ 招 _レ 邑 _レ 若 _レ 蚶 _ル	應 _レ 伏 _ル ト _レ 伏 _ル	應 _レ 在 _ル ト _レ 在 _ル	應 _レ 迷 _レ 列 _レ 子 _ル	應 _レ 乘 _ル ト _レ 乘 _ル	應 _レ 迷 _ル ト _レ 迷 _ル	應 _レ 別 _レ 淚 _ル	應 _レ 折 _レ 得 _ル	應 _レ 同 _レ 戶 _ル
	590	484	400	388	364	216	178	48
	下 _レ 品 _レ 應 _レ 足 _ル ト _レ 品 _レ 應 _レ 足 _ル	應 _レ 言 _ル ト _レ 言 _ル	應 _レ 誇 _レ 尚 _ル	應 _レ 疑 _ル ト _レ 疑 _ル	應 _レ 鑽 _レ 花 _レ 樹 _レ 取 _ル	應 _レ 濕 _ル ト _レ 濕 _ル	應 _レ 鳥 _レ 宿 _ル	應 _レ 言 _ル ト _レ 言 _ル

天理図書館蔵 『貞和本和漢朗詠集』の訓点をめぐって

・「使」の訓法

54 若使もし韶光シヤウカウ

484 若使もし榮期エイキ

・「教」の訓法

10 教啼キョウテイ鳥流チウリウ來ライ由ユ

「將」は、平古止点から現行の訓法のように再読していると考えられる。「末」については、再読されている64・99の二例について詳細に検討すると、仮名の「夕」が文字の筆意(別筆)により、後世の手によって加筆されたと推察される。即ち、再読は本来なされていない。[當]は、一例だけであるが再読されている。[應]もまた再読されていない。

三、仮名遣について

・オをヲに誤ったもの

233 聲セウ
24 思シ
613 雙シウ
51 送シウ
622 毅シ
88 帶テイ
761 鬼キ
96 帶テイ

・ヲをオに誤ったもの

27 惜シク
67 坐サ藉シヤク
261 冒マウ
651 終シウ終シウ
587 教キョウ
599 終シウ
607 有境ユウキョウ
466 關カン

・ヒをイに誤ったもの

54 今宵イマヨ
82 洗シ
90 裝シヤウ

・イをヒに誤ったもの

403 老ロウ
730 老ロウ

・へをエに誤ったもの

50 歸キ
60 歸キ
83 歸キ

・エをエに誤ったもの

43 先嘆センタン

・エをへに誤ったもの

762 飢 へま

・ハ行をワ行に誤ったもの

27 憐 わ

46 潮 わ

63 鷄 わ

65 尚 わ

109 交 わ

188 仍 わ

464 紫闌 わ

632 露沾 わ

以上、およそ平安時代末期以降の現象を示している。(所謂

定家仮名遣の範囲を出ない)

四、音便について

・促音便 (すべて四段活用動詞連用形が、「て」に続く例。多くはツ表記だが、無表記の例もある。)

9 春入 ル

30 折梅花 ル

50 春歸 ル

51 我醉 ル

82 洗來 ル

236 定 ル

545 誤 ル

651 終 ル

698 却 ル

天理図書館蔵 『貞和本和漢朗詠集』の訓点をめぐって

・イ音便

10 續 イ

22 著 イ

47 介 イ

65 啼 イ

216 賢 イ

263 先 イ

334 乾 イ

339 衝 イ

359 利 イ

487 就 イ

495 叩 イ

727 介 イ

・ウ音便 (形容詞連用形の例のみ見られる。)

410 重 ウ

488 隣 ウ

・撥音便 (m音便例のみ見える。△表記ではなくン表記である。)

27 踏 ン

96 含 ン

755 病 ン

五、朱筆・黄筆について

さて、前述のように該本は、墨筆とともに全巻にわたって朱筆・黄筆による書き込み等がなされている。奥書より黄筆は、建長三年菅原長成が父爲長の説を受けて執筆加点了本に、藤

原式家の敦光の本から引用加点了たものである。朱筆・墨筆は弘安三年藤原長英が加点了たしとされるされている。この該本の朱筆・黄筆がどのような性格を示すものかを検証してみたいと考える。

比較検討にあたって用いた和漢朗詠集は、該本の上巻奥書に記載がある蜂須賀家旧蔵専修大学図書館蔵建長三年（一二四九）本を用いた。これは、上下二帖からなり、上巻は奥書より菅原長成自筆本と知られ、朱筆の書き込みがある。下巻は、長成の息清長が、祖父為長卿の自筆本を写した転写本である。

。朱筆による書き込み

該本と専修大学図書館蔵建長三年本の朱筆による書き込みについて比較を試みた。

（上段は該本を示し、下段は建長三年本を示し、マル括弧は朱筆を示す。）

	(天理大本)		(専修大本)	
377	腋 <small>アキ</small>	腋 <small>アキ</small>	腋 <small>アキ</small>	腋 <small>アキ</small>
341	曉籠 <small>アキカケ</small>	曉籠 <small>アキカケ</small>	曉籠 <small>アキカケ</small>	曉籠 <small>アキカケ</small>
328	身 <small>ミ</small>	身 <small>ミ</small>	身 <small>ミ</small>	身 <small>ミ</small>
233	聲 <small>コエ</small>	聲 <small>コエ</small>	聲 <small>コエ</small>	聲 <small>コエ</small>
196	水鏡 <small>ミヅキョウ</small>	水鏡 <small>ミヅキョウ</small>	水鏡 <small>ミヅキョウ</small>	水鏡 <small>ミヅキョウ</small>
195	異例 <small>イリ</small>	異例 <small>イリ</small>	異例 <small>イリ</small>	異例 <small>イリ</small>
188	屋上 <small>ヤ</small>	屋上 <small>ヤ</small>	屋上 <small>ヤ</small>	屋上 <small>ヤ</small>
117	詭譎 <small>ケイゴ</small>	詭譎 <small>ケイゴ</small>	詭譎 <small>ケイゴ</small>	詭譎 <small>ケイゴ</small>
71	落 <small>オチ</small>	落 <small>オチ</small>	落 <small>オチ</small>	落 <small>オチ</small>
10	消息 <small>ソウジ</small>	消息 <small>ソウジ</small>	消息 <small>ソウジ</small>	消息 <small>ソウジ</small>
393	白頭 <small>ハクダウ</small>	白頭 <small>ハクダウ</small>	白頭 <small>ハクダウ</small>	白頭 <small>ハクダウ</small>
341	江春 <small>カウチン</small>	江春 <small>カウチン</small>	江春 <small>カウチン</small>	江春 <small>カウチン</small>
331	風 <small>カゼ</small>	風 <small>カゼ</small>	風 <small>カゼ</small>	風 <small>カゼ</small>
309	行 <small>ユキ</small>	行 <small>ユキ</small>	行 <small>ユキ</small>	行 <small>ユキ</small>
224	意宜 <small>イナリ</small>	意宜 <small>イナリ</small>	意宜 <small>イナリ</small>	意宜 <small>イナリ</small>
195	悲 <small>ウレシ</small>	悲 <small>ウレシ</small>	悲 <small>ウレシ</small>	悲 <small>ウレシ</small>
194	鳥下 <small>トリノ</small>	鳥下 <small>トリノ</small>	鳥下 <small>トリノ</small>	鳥下 <small>トリノ</small>
130	舞下 <small>マユノ</small>	舞下 <small>マユノ</small>	舞下 <small>マユノ</small>	舞下 <small>マユノ</small>
92	暖 <small>ヌク</small>	暖 <small>ヌク</small>	暖 <small>ヌク</small>	暖 <small>ヌク</small>
12	嬾 <small>ヲシ</small>	嬾 <small>ヲシ</small>	嬾 <small>ヲシ</small>	嬾 <small>ヲシ</small>

上巻・下巻にわたり朱筆は40例あり、そのうち前頁に掲げた20例が専修大本との一致が認められた。しかし、一致例は、上巻のみに集中し、下巻においては、該本のように朱筆で色分けされることなく、墨筆による書き込みとして記述されている。

。朱筆による合点

該本の朱筆による合点は、同本黄筆による合点と重複するものも含まれるが、一致例は、さきに述べた朱筆による書き込み例と同様、専修大本上巻において多くの一致が認められた。下巻においては、朱筆の合点は、全く記載されておらず、墨筆による書き込みについては、多くの一致がみとめられた。

上巻																			
65	59	55	48	47	47	45	43	42	38	29	27	27	24	24	24	24	13	6	5
竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹
竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹
242	196	193	186	180	182	182	182	182	182	182	182	182	182	182	182	182	182	182	182
竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹
竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹
310	299	299	288	288	287	283	282	282	282	282	282	282	282	282	282	282	282	282	282
竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹
竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹
下巻																			
竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹
竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹

● 朱筆による合点
 ○ 朱筆
 — 朱筆合点
 ... 黄筆合点

天理大本 専修大本 天理大本 天理大本 天理大本 天理大本 天理大本 天理大本 天理大本 天理大本 天理大本 天理大本 天理大本 天理大本 天理大本 天理大本 天理大本 天理大本 天理大本 天理大本

403	397	399	398	397	371	367	343	344	343	342	348	345	345	330	318	318	313	311	310
疑	剪	忍	忍	忍	歩	境	無	自	洞	華	迷	了	加	鴻	滿	深	合	深	残
疑	剪	忍	忍	忍	歩	境	無	自	洞	華	迷	了	加	鴻	滿	深	合	深	残
423	423	420	420	426	425	423	422	418	417	414	412	412	411	407	407	407	407	406	404
文	逆	蕭	蒙	蒙	霽	霽	霽	霽	霽	霽	霽	霽	霽	霽	霽	霽	霽	霽	霽
文	逆	蕭	蒙	蒙	霽	霽	霽	霽	霽	霽	霽	霽	霽	霽	霽	霽	霽	霽	霽
430	417	417	425	425	423	422	421	410	410	404	405	404	400	449	447	443	439	435	
傳	知	刻	集	權	開	台	台	台	台	台	台	台	台	台	台	台	台	台	台
傳	知	刻	集	權	開	台	台	台	台	台	台	台	台	台	台	台	台	台	台

天理大本
專修大本
天理大本
專修大本
天理大本
專修大本

593	593	594	592	595	594	593	592	597	596	594	592	590	494	493	492	491	488	485	484
柳	柳	柳	柳	柳	柳	柳	柳	柳	柳	柳	柳	柳	柳	柳	柳	柳	柳	柳	柳
柳	柳	柳	柳	柳	柳	柳	柳	柳	柳	柳	柳	柳	柳	柳	柳	柳	柳	柳	柳
616	614	613	608	608	607	594	593	590	589	580	579	577	575	574	573	556	556	554	544
展	展	展	展	展	展	展	展	展	展	展	展	展	展	展	展	展	展	展	展
展	展	展	展	展	展	展	展	展	展	展	展	展	展	展	展	展	展	展	展
661	660	659	657	653	651	643	635	635	635	633	631	628	625	624	624	622	621	620	618
述	述	述	述	述	述	述	述	述	述	述	述	述	述	述	述	述	述	述	述
述	述	述	述	述	述	述	述	述	述	述	述	述	述	述	述	述	述	述	述

天理大本
專修大本
天理大本
專修大本
天理大本
專修大本

723	716	716	716	714	713	712	711	711	709	702	699	694	689	682	669	668	663	661					
聲 <small>コト</small> 華 <small>カ</small>	惡 <small>コト</small>	薰 <small>カ</small>	暮 <small>カ</small>	綠 <small>カ</small>	香 <small>カ</small>	軟 <small>カ</small>	筭 <small>カ</small>	取 <small>カ</small>	思 <small>カ</small>	望 <small>カ</small>	映 <small>カ</small>	陽 <small>カ</small>	映 <small>カ</small>	雲 <small>カ</small>	卷 <small>カ</small>	知 <small>カ</small>	求 <small>カ</small>	去 <small>カ</small>	暗 <small>カ</small>				
聲 <small>コト</small> 花 <small>カ</small>	惡 <small>コト</small>	薰 <small>カ</small>	暮 <small>カ</small>	綠 <small>カ</small>	香 <small>カ</small>	軟 <small>カ</small>	笑 <small>カ</small>	取 <small>カ</small>	思 <small>カ</small>	望 <small>カ</small>	映 <small>カ</small>	陽 <small>カ</small>	映 <small>カ</small>	雲 <small>カ</small>	卷 <small>カ</small>	知 <small>カ</small>	求 <small>カ</small>	去 <small>カ</small>	暗 <small>カ</small>				
759	759	755	751	747	746	744	745	742	742	737	737	737	737	727	720	727	728	728	723				
沈 <small>コト</small>	亞 <small>カ</small>	逸 <small>カ</small>	使 <small>カ</small>	勿 <small>カ</small>	壁 <small>カ</small>	昇 <small>カ</small>	何 <small>カ</small>	幾 <small>カ</small>	何 <small>カ</small>	去 <small>カ</small>	爲 <small>カ</small>	重 <small>カ</small>	辯 <small>カ</small>	廟 <small>カ</small>	過 <small>カ</small>	強 <small>カ</small>	重 <small>カ</small>	過 <small>カ</small>	漏 <small>カ</small>	不 <small>カ</small>	過 <small>カ</small>	不 <small>カ</small>	過 <small>カ</small>
沈 <small>コト</small>	亞 <small>カ</small>	逸 <small>カ</small>	使 <small>カ</small>	勿 <small>カ</small>	壁 <small>カ</small>	昇 <small>カ</small>	何 <small>カ</small>	幾 <small>カ</small>	何 <small>カ</small>	去 <small>カ</small>	爲 <small>カ</small>	重 <small>カ</small>	結 <small>カ</small>	廟 <small>カ</small>	過 <small>カ</small>	強 <small>カ</small>	重 <small>カ</small>	過 <small>カ</small>	漏 <small>カ</small>	不 <small>カ</small>	過 <small>カ</small>	不 <small>カ</small>	過 <small>カ</small>
				801	794	793	792	785	781	778	778	778	769	768	762	762	761	761	760	760			
				歸 <small>カ</small>	朽 <small>カ</small>	逢 <small>カ</small>	爭 <small>カ</small>	無 <small>カ</small>	開 <small>カ</small>	馨 <small>カ</small>	香 <small>カ</small>	不 <small>カ</small>	用 <small>カ</small>	出 <small>カ</small>	諸 <small>カ</small>	劍 <small>カ</small>	楚 <small>カ</small>	何 <small>カ</small>	戴 <small>カ</small>	鏡 <small>カ</small>	生 <small>カ</small>		
				歸 <small>カ</small>	朽 <small>カ</small>	逢 <small>カ</small>	爭 <small>カ</small>	無 <small>カ</small>	用 <small>カ</small>	馨 <small>カ</small>	香 <small>カ</small>	不 <small>カ</small>	用 <small>カ</small>	出 <small>カ</small>	諸 <small>カ</small>	劍 <small>カ</small>	楚 <small>カ</small>	何 <small>カ</small>	戴 <small>カ</small>	鏡 <small>カ</small>	生 <small>カ</small>		

天理大本
專修大本
天理大本
專修大本
天理大本
專修大本

。黄筆による書き込み

さきに述べた該本の朱筆による書き込みと同様の比較を、
本の黄筆による書き込みについても試みた。(上段は該本を示
し、下段は專修大本を示し、マル括弧は黄筆を示す。)

天理図書館蔵『貞和本和漢朗詠集』の訓点をめぐって

653	493	367	335	225	145	121	55	29
漢高 <small>ハカウ</small>	曉繼 <small>ハカウ</small>	時 <small>トキ</small>	食 <small>クハ</small>	感 <small>カン</small>	生衣 <small>ナマモノ</small>	織 <small>オリ</small>	不用 <small>ナラズ</small>	摩 <small>マ</small>
漢高 <small>ハカウ</small>	曉繼 <small>ハカウ</small>	時 <small>トキ</small>	食 <small>クハ</small>	感 <small>カン</small>	生衣 <small>ナマモノ</small>	織 <small>オリ</small>	不用 <small>ナラズ</small>	摩 <small>マ</small>
688	581	376	348	331	148	140	61	30
衣 <small>キ</small>	來時 <small>キトキ</small>	似 <small>ニ</small>	製 <small>ツク</small>	開 <small>ヒラ</small>	生 <small>ナマ</small>	有 <small>ア</small>	歸 <small>カエ</small>	押 <small>オシ</small>
衣 <small>キ</small>	來時 <small>キトキ</small>	似 <small>ニ</small>	製 <small>ツク</small>	開 <small>ヒラ</small>	生 <small>ナマ</small>	有 <small>ア</small>	歸 <small>カエ</small>	押 <small>オシ</small>

上に掲げたように黄筆による書き込みが、専修大本と一致するのは2例のみであった。該本の奥書に、藤原式家の敦光の本から引用加点了と記されているので、黄筆による書き込みは、藤原式家の訓読を伝えていることを示すと解される。

以上、朱筆・黄筆を中心に、該本と専修大学蔵建長三年本と比較・検討を行ったが、該本の朱筆による書き込みにおいては58%、朱筆合点においても57%、専修大学蔵建長三年本と一致がみられることがわかった。この結果より朱筆による書き込み・朱筆合点は、該本と専修大学蔵本建長三年本が祖本とする菅原家の訓法を示すものと解することができる。

六、おわりに

天理図書館蔵貞和三年本と専修大学蔵本建長三年本との比較において菅原家訓法を示すために朱筆の書き込み・朱筆合点を使用したと考えられる。該本と同一内容を有する諸本との比較検討より、菅原家の訓法を明らかにしたいと思う。

(注)

- (1) 山田孝雄著『和漢朗詠集』(岩波文庫・昭和五年)。
- (2) 堀部正二編著・片桐洋一補『校異和漢朗詠集』(大学堂書店・昭和五十六年)。
- (3) 伊藤正義・黒田彰・三木雅博編著『和漢朗詠集古注釈集成』全三卷(大学堂書店・平成元〜九年)。
- (4) 黒田彰著『中世説話の文学史的環境』(和泉書院・昭和六十二年)。
- (5) 三木雅博著『和漢朗詠集とその享受』(勉誠社・平成七年)。
- (6) 山崎誠著『中世学問史の基底と展開』(和泉書院・平成五年)。
- (7) 青柳隆志著『日本朗詠史』研究篇・年表篇(笠間書店・平成十一〜十三年)。
- (8) 二玄社・日本名跡叢刊に『墨流本和漢朗詠集』が入り、古筆切並びに鴻池家旧蔵本が、久曾伸昇編『和漢朗詠集切集成』(汲古書院・平成十年)に所収されている。

- 日本古典文学会編『和漢朗詠集』(ほるぶ出版・昭和五十年)。
- 陽明叢書国書篇第七輯『和漢朗詠集・新撰朗詠集』(思文閣出版・昭和五十三年)。
- (9) 朽尾武著『貞和本和漢朗詠集』(臨川書店・平成五年)により影印・翻刻がなされている。
- (10) (2) 所掲堀部正二編著(二十九頁)参照。
- (11) (9) 所掲本。
- (12) 大矢透著『仮名遣及仮名字体沿革史料』(勉誠社・昭和四十四年・平成十七年縮刷版発行)(三十四頁)参照。
- (13) 小林芳規著『平安鎌倉時代における漢籍訓讀の國語史的研究』(東京大学出版会・昭和四十二年)第五節漢籍の古點本に用いられた濁音符(二二八三頁)参照。
- (14) 専修大学図書館蔵古典籍影印叢刊『和漢朗詠集』(専修大学出版局・昭和五十六年)中田武司著『和漢朗詠集』解題
- (15) 中田武司著『和漢朗詠集攷』(専修国文)二一七号・昭和五十五年九月)。